

頸城ガス田大噴出から 五十年を顧りみて

名譽市 太田四郎（本町五丁目出身）

昭和三十四年、戦後最大の岩戸景気
年に、頸城ガス田から大量の天然ガスが
噴出し、地元が期待に湧いてから、今年
で丁度五十年になる。

頸城地区は明治の中頃から少量の石油
を産出していたが、昭和十年代になって
日本石油と日本鉱業が各所で本格的に試
掘したが、僅かな石油と当時問題にされ
なかった天然ガスしか産出しなかった。
戦後、帝国石油がこの区域を引継いで
積極的に進めて来たが、昭和三十年旧明
治村（現頸城区）でガス田探鉱に成功し、
信越化学や日本ステレンス（現住友金属）
にガスを供給するようになり、これが日
本のガスブームのはしりであった。つい
で潟町地区でガスは僅かだが多量のお湯
が噴出し、これが昭和三十三年開湯した
大潟町九戸浜の鶴の浜温泉の元である。
しかし、三十二年期待された東中島（旧

保倉村）の試掘は失敗に終わった。当時の
帝石岸本社長の手記によれば「東中島一
号井の不成功は私にとつて大きなショッ
クであり、ひそかに希望を持っていた高
田平野は諦めなければならぬことを意
味したからである」と記されている。

こんな失意の時、岸本社長は三十二年
十一月現地視察で柏崎から直江津へ向い
潟町にかかった時、自動車を道のまん中
で止める二人の老人がおり近くの松林へ
案内された。そこで潟町の有力者二十人
位から「ガスの需要はいくらでもあり、
是非潟町のガスを開発してもらいたい」
と熱心に要望された。また、直江津でも
高田、直江津両市の有力者から同様の要
望がなされた。

自動車を止めた二人の老人は、一人は
藤縄清治大潟町長（明治二十六年生、当
時六十五才）で酒造業を営み、元県会議

長で地元の治水工事、町村合併をはじめ
果敢でも業績をあげられたベテランの政
治家である。もう一人は元下里川村現柿
崎区）の地主だった三上廉平老（明治
十九年生、当時七十二才）で文筆家、教
育者でもあり、若い頃から地下資源開発
に情熱を燃し、頸北の名物男の一人と云
われていた。

藤縄町長、三上老はじめ地元の熱意に
はげまされた岸本社長はこれに応えて、
数ヶ所の試掘をしたが失敗に終わった。

しかし昭和三十三年十二月黒井五号井
を海に向かって二十度の傾斜角で掘り始
めた処三十四年一月十九日深さ一六三〇

町長の「住民の幸せと地元振興の願い」
そこに三上廉平老の「夢と勤と執念」が
ありそこで、三人三様の個性の男の惚れ
合いの成果ともみられている。

米で高圧のガス層に達し、大成功であ
った。後日、成功のお祝いの会が周辺市
町村地元関係者が集り大潟町で盛大に行
われた。「その席上、三上老が「頸城の
成功を毎日朝四時に起きて神様にお祈り
しました。今里井五号井の成功をみて、
私は何時でも安心して死ぬことができま
す」と老の感激を込めて語られたことは
私は終生忘れ得ぬ感激を覚えた」と岸本
社長は当時、所感を述べられている。こ
の日は帝石にとつても昭和十七年会社創
立以来の最良の日であった。

里井の成功により海底部にガス層が広
がっていることが判り、同年三月には潟
町五号井が成功し、十月には潟町二本
木間三七kmのパイプラインが完成しダイ
セル新井、日曹二本木にガス供給を始め
た。十二月には潟町十六号井が超大噴出
し日本最大のガス井となった。その後多
くのガス井が成功し、昭和三十七年には
潟町東京間三三五kmのパイプラインも
完成した。

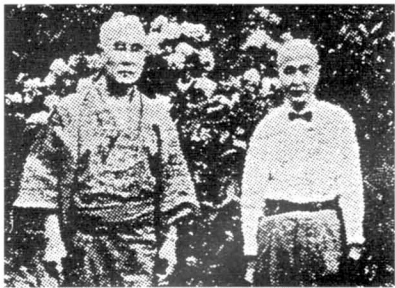
この成功は地元の熱意と帝石技術の結
集の賜物であるが、その根底には帝石岸
本社長の「企業意欲と経営判断」、藤縄

その後頸城ガス田は三十九年最高のガ
ス産出量になったがその後次第に減少
し、昭和六十二年南長岡（旧越路町）と
頸城間六三kmのパイプラインが布設さ
れ、南長岡ガス田によって補充された。
しかし当時国産エネルギー源の大宗と
して華々しくデビューした頸城ガス田も



太田 四郎さん

遂に平成十三年閉鎖されることとなった。現在は当時建設されたガスパイプラインなどインフラによってエネルギー供給の役割の一端を果たしている。



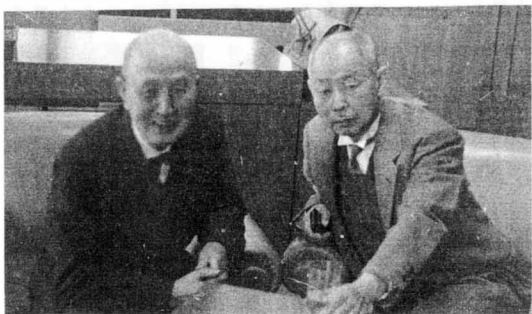
岸本社長を説得して、潟町ガス田を発見させた、藤縄（左）と三上（右）



岸本社長（左）と藤縄町長（右）



成功した潟町5号井



三上廉平老（左）と鮎川義介帝石会長（右）